



博物館だより

Nagano City Museum

第120号

地域の宝を救え！今も続くレスキュー活動～陸前高田、そして、長野～



安政4年の絵図（赤沼東組蔵）

長野市立博物館では、2022年1月15日（土）～3月13日（日）に被災資料に関する企画展「地域の宝を救え！今も続くレスキュー活動～陸前高田、そして、長野～」を開催します。

令和元年東日本台風により、長野市は多大な損害を被り、これまで受け継がれてきた資料も被災しました。長野市立博物館では、ボランティアを中心に、被災資料の保全活動を現在も進めています。

本展では、この活動内容を紹介し、被災資料からわかる地域の歴史についても紹介します。また、2011年の東日本大震災から10年の時が過ぎた今でも、震災による被災資料の保全活動は続けられています。震災で、大きな被害を受けた陸前高田市立博物館の活動と資料を紹介します。長野と陸前高田の活動の紹介を通して、災害から文化財をどのように守っていくのかを考えていきます。

1 章 令和元年東日本台風と文化財レスキュー

～長野市の場合～

1-1. 令和元年東日本台風の被災状況

令和元年台風 19 号の接近に伴い、長野市では令和元年 10 月 12 日（土）未明から降り出した雨が、時間を追うごとに増えて豪雨となり、12 日 15 ～ 16 時をピークに 13 日（日）未明まで降り続けました。

台風による大雨の影響を受けて、千曲川流域で護岸の崩落や堤防の欠損・越水などによる浸水被害が発生しました。長野市内では、長沼、豊野、古里、篠ノ井、松代、若穂地区の被害が大きく、穂保（長沼地区）では千曲川の堤防が決壊し、支所や学校、医療施設や社会福祉施設、長野新幹線車両センターなど一帯に深刻な浸水被害をもたらしました。

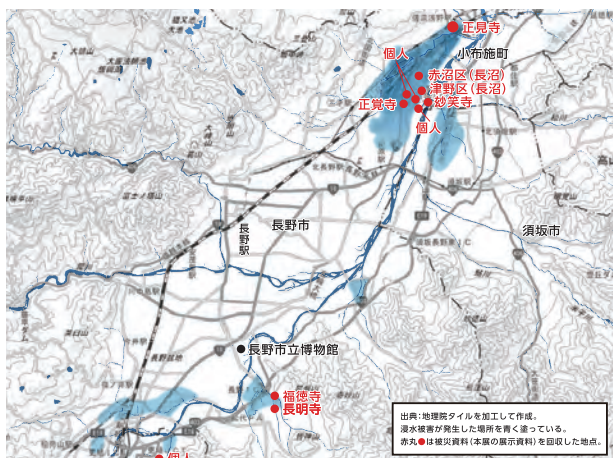


図 1：浸水推定地図（提供：国土地理院）
浸水被害が発生した場所を青く塗ってある。
●は被災資料を回収した地点。

1-2. 長野市における文化財レスキュー

台風接近からおおよそ 1 週間経った 10 月 21 日から市内各地をまわり、文化財レスキューをはじめました。お寺や個人宅、地区の公会堂など様々な場所で被災した資料を長野市立博物館に搬入しました。その後、多くの人々の協力を得ながら、試行錯誤を重ねて、被災資料の応急処置を進めてきました。活動の中

心は、博物館ボランティアである、ながはくパートナー文化財保存グループです。この章では、博物館で受け入れた被災資料とともに、文化財保存グループの活動を紹介します。

・古文書（和紙）（長沼・赤沼東組蔵）

江戸時代の文書や絵図が多く含まれており、地域の歴史を知る上で重要な資料です。割地や瀬替えに関する資料が見られ、この地域が川と共に暮らしてきたことがわかります。赤沼東組の資料は、資料を保管していた筆筒ごと被災しました。筆筒を解体し、中の資料を取り出し、応急処置を行っています。

・花鳥図屏風（長沼・妙笑寺蔵）

屏風の下張りが和紙と新聞紙の両方からなっていることから、近世から近代にかけて制作されたものと思われます。泥水で濡れており、破損もしていたため、屏風を解体し、本紙（絵が描かれている紙）を取り出しました。現在、真田宝物館で幾重にも重なる下張り文書の取り出し作業が進められています。

・個人所蔵文書

今回の水害では、多くの個人所蔵の資料が被災しました。個人のお宅にも、様々な資料が眠っています。一度水に浸かってしまっても、早く処置ができれば、資料を救える可能性があがるため、被災した場合、可能な限り早く連絡をいただければ、より良い状態にすることが可能です。そして、事前に所在がわかっている場合は、水害が起こりそうなときに、資料を高い所へ避難することが可能になります。みなさんのお宅にも貴重な資料が眠っているかもしれませんので、是非ご確認ください。

・大般若経（松代・福德寺蔵）

大般若経は 600 巻にも及ぶ經典で、大唐の玄奘三蔵が訳したものです。經典を広げ



図2：作業の様子

てパラパラとめくりながら読む、転読という方法で読まれることもあります。福德寺の大般若経は、水害後本堂に出された状態でレスキューされました。その後博物館内で、多くのボランティアによって、乾燥させて泥を落とし、固着したページを開く作業が行われました。その後、地元大学の学生によって写真撮影や寄進者の墨書の確認も終了したのですが、再度カビが発生してしまいました。資料の燻蒸を行い、再び資料の点検を行いました。

・大般若経（長沼・妙笑寺蔵）

長沼の妙笑寺からも被災した大般若経を受け入れました。福德寺の経典と同様に、応急処置を行いました。

・掛軸（長沼・正覚寺蔵）

カビや泥を取る作業の他、カビや染み、泥の付着、欠損の状況などを記録しました。

この記録が後に専門家へ修理を依頼する際に重要な情報となります。

・近現代文書（長沼・津野区蔵）

近代から現代にかけて使われている紙は、それ以前に使われていた和紙と比べると傷みやすく、また、文字が書かれているインクも墨に比べると水に弱いため、応急処置は困難を極めました。極力、水を使わずに先を丸めた竹べらで泥の塊を取ったり、歯ブラシや刷毛で砂状になった泥を掃き出したりしました。

・南町奉行所関連文書（豊野・正見寺蔵）

市内豊野町の正見寺所蔵の古文書から江戸時代の訴状約180点が見つかりました。訴状は天保6～12年（1835～41）年のものが多く、江戸・麹町の髪結床の賃貸に関する金銭トラブルを訴え出たものや、町（自治組織）の運営に関わる有力町人「月行事」たち

がキリスト教を信じたり賭け事をしたりしない」と誓約したものなどがありました。

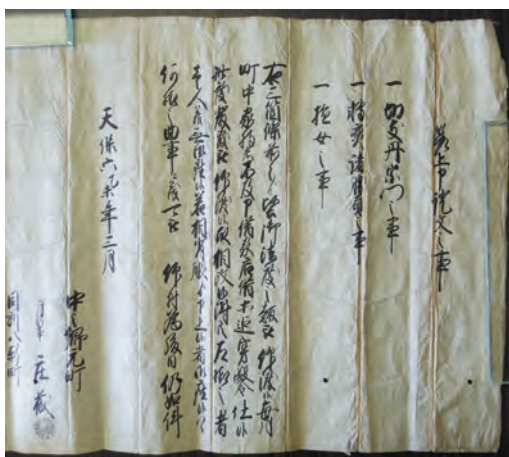


図3：南町奉行所関連文書（長野市豊野町正見寺蔵）
切支丹宗門、博奕諸勝負、遊女の禁止三力条について
遵守することを誓約したもの。

応急処置道具

これまで行ってきた被災資料への応急処置は試行錯誤の連続でした。そのため、使う道具についても工夫を重ねています。その都度、様々な道具を持ってきて、用途に合わせて手作りしました。

1-3. 被災資料から読み解く地域の歴史

江戸時代の治水と災害

長野盆地は古くから千曲川による水害に悩まされてきました。水害が起こった後、人々は川の流路を変える瀬替えを行い、土地の再開発を行いました。赤沼東組所蔵の絵図（図4）には、安政4年（1857）における千曲川の瀬替えの様子が描かれています。



図4：安政4年5月赤沼河原新田絵図（赤沼東組蔵）

安政4年（1857）の度々の洪水で千曲川は大きく流路を変えました。黄色く塗られ、「居村」と記された赤沼河原新田の集落を堤防（黒線）がとり囲んでいます。集落の周り（堤外）に描かれたオレンジ色の「前々起返」は水害からの復旧が以前に完了した耕地、「鋤入」「新開」は洪水被害を受けて再開発に取り組んでいる耕地を意味します。このような「起返」地を守るために千曲川沿いに「自普請岸田」（赤点の並び、長200間＝360mある）が設けられていました。

近現代の治水と災害

近代以降も多くの水害が起こっています。中でも大きな被害をもたらしたのは、明治29年の水害です。水害惨状図（赤沼区蔵）にその様子が描かれています。被害状況は、千曲川流域では流失・浸水家屋1万戸以上とされています。下流の信濃川流域でも多くの被害がありました。



図5：水害惨状図（赤沼区蔵）。広範囲にわたり、家や木々が水に浸かっている様子がわかる。

被災資料に見る村の姿

文化財レスキューで救出された近現代資料としては、赤沼公会堂に所蔵されていた「赤沼区有文書」や、津野公会堂に保存されていた津野区有文書（氏子関係文書をふくむ）がその代表的なものです。これらの記録からは、村の姿や地域の人々の生活をうかがうことが

できます。そして、「水害」とともに暮らす、ということがこの地域の大きな特徴であることが改めてわかってきました。

被災資料の中には、調査が行き届かず、使い方など詳細がわかっていないものもあります。地域の人々との対話の中で、調査・研究を進めていきたいと思っています。

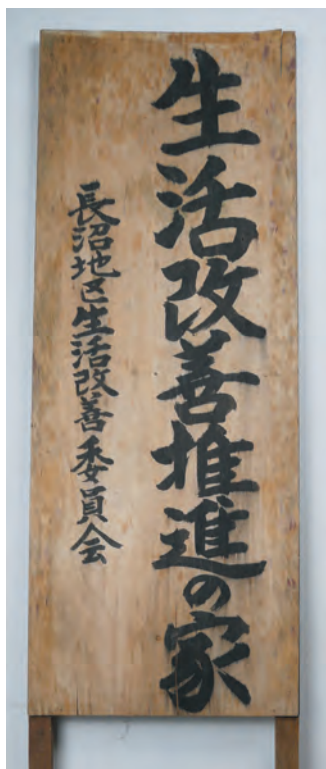


図6：「生活改善推進の家」看板（赤沼区蔵）

被災資料に見る戦争

敗戦直後、戦時中の記録は多くの地域で廃棄処分されました。長沼（赤沼）地域についても戦時中の記録はほとんど失われているようです。今回、赤沼区総代のもとに保管されていた文書綴り（1948〔昭和18〕年）が救出できたことは幸運でした。『長沼村史』でも詳しく書かれていない戦時下の赤沼地域（長沼地域も含む）の様子がこの記録ですいぶん明らかになりました。リンゴ作をふくむ戦時期の食糧増産のこと、出征や戦没者の遺骨の出迎え行事、長沼地震の影響など興味深い事実が浮かび上がってきます。

2章 東日本大震災から10年 ～陸前高田の場合～

2011年3月11日に発生した、平成23年東北地方太平洋沖地震による津波によって、陸前高田市は深刻な被害を受けました。市立

博物館も被災し、収蔵資料の多くが津波で流されてしまいました。陸前高田市立博物館ではこれらの資料を拾い集め、安定化処理をしました。この作業は地震から10年経った今も続けられています。ここでは、企画展の展示資料をいくつか紹介します。



図7：劣化と安定化処理

3-1. 津波災害関連資料

当時の災害状況の記録として、破損した陸前高田市立博物館の壁面の一部や被災した備品なども博物館資料として保存されています。



図8：被災したコンピュータ（陸前高田市立博物館蔵）

3-2. 高田松原関連資料

陸前高田の象徴である高田松原は、津波によりその大半が流されてしまいました。その中でも、津波に耐えて残った「奇跡の一本松」が有名です。博物館には、震災前の高田松原の写真や動植物標本が残されています。これらは、かつての高田松原の姿を知るうえで貴重な資料です。現在では、高田松原の復元が進められています。



図 9：高田松原の写真と動植物標本。
(陸前高田市立博物館蔵)

3-3. 生活関連資料

博物館では、レコードや紙芝居など昭和の生活に関する資料が保管されています。津波により市街地が失われた陸前高田の日常生活を物語る貴重な資料です。



図 10：グスコブドリの伝記の紙芝居。
(陸前高田市立博物館蔵)

3章 エピローグ～これから～

大規模な災害が起きると、古くから保管されてきた資料が失われる可能性が高くなります。そうすると、地域の大切な記憶が失われてしまいます。災害を乗り越え、地域の歴史や文化を後世へとつないでいくにはこれからどのようにしていけばいいのでしょうか。

災害が起こったとき、所在が不明なものは、救出ができません。資料を守るためには、普段から資料の所在と価値の確認を行うことが重要です。その際、国や市町村で指定されている文化財だけでなく、それ以外の資料についても所在や価値を認識しておく必要があります。

災害が起こると、被災した地域の団体だけで資料の保全活動を行うのは困難です。そのため、各地で、地域の資料を守るためのネットワーク（資料ネット）がつくられています。長野県では、令和元年東日本台風を契機に2019年10月22日、信州資料ネットが設立されました。

上で挙げた活動を通して、遺されてきた資料を引き継いでいくとともに、現在の災害についても記録を残していく必要があります。

本展では、台風による水害で被災した長野と、津波による水害で被災した陸前高田の2ヶ所での、被災資料の保全活動について紹介しました。各地で災害は多発し、多くの資料が失われ続けています。本展示では、地域の歴史を伝える様々な資料を紹介しました。本展が、地域に残された資料について見直すきっかけとなれば幸いです。

(陶山徹)

2019.10.13 千曲川堤防決壊
市内越水/各地で内水氾濫



長野市立博物館



被災文書受け入れ



専門家が水損資料保全を指導



地元大学生ボランティアと連携

被災資料は掛軸・屏風・衝立・仏像・厨子・古文書・典籍・書画など約1万点
長期的な活動に向け、体制を見直しながら柔軟に対応

市民ボランティアと博物館 進化する連携と技術

多分野の専門家を招き積極的に学ぶ



屏風の解体ワークショップ



被災地域住民が制作した紙芝居
「伝えよう水害の怖さ」



掛軸の解体ワークショップ



状態の悪い文書の処置
リモート指導を受ける



確認された貴重な資料/南町奉行所訴状の解説

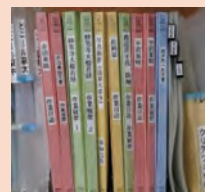


大般若經典の安定化作業

市民ボランティアの声を形に

- ・朝会/終会を行い、情報共有と連絡事項の徹底
- ・グループリーダーを置き、作業の統括と博物館とのパイプ役を担う
- ・1点毎に作業履歴を作成し、作業状況を明確化
- ・グループ毎の作業日誌により進捗状況を把握
- ・ホワイトボードの活用。図示で分かりやすく
- ・ある物利用で必要な道具を制作し、活動を効率化

作業履歴	作業日時	作業内容	作業場所	作業担当者
1	10/13	屏風の解体	博物館	市民ボランティア
2	10/13	掛軸の解体	博物館	市民ボランティア
3	10/13	文書の処置	博物館	市民ボランティア
4	10/13	資料の確認	博物館	市民ボランティア
5	10/13	資料の解説	博物館	市民ボランティア



*令和元年東日本台風による被災から1年2カ月経過
ボランティア参加者 延べ1561人
ご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます

被災文書解体/洗浄/復元ワークショップ

制作:ながはくパートナー文化財保存グループ

ボランティアのみなさんの 文化財保全活動への思い

ここでは、被災資料の保全作業を続けている、ながはくパートナー（博物館ボランティア）文化財保存グループの主要メンバーによる保全活動についてのコメントを紹介します。

・私は以前から博物館ボランティアをしているので、その御縁でこの活動にも参加しています。泥やカビ、臭気等と格闘しながらデリケートな作業も多々ありますが、学習会や専門家のご指導を頂きながら貴重な経験を通して気づきや発見を見出す事もあり、素敵な仲間と共に楽しみつづけて活動をしています。(A.K)

・「文化財レスキュー」発足の週末から参加。当時、同施設に勤務しており、運び込まれた経典、掛け軸や仏像の保全作業の大変さを見て、何か手伝えないか…という思いから、休日のみ活動に参加。初めての経験に戸惑いながらも多方面の指導を受け、この2年間で現在の「長野方式」となり活動している。泥まみれがキレイになり持ち主に帰る。未だ遠いが最後のひとつまで寄り添い見届けたい。復興から復幸へ。(C.M)

・2019年の台風15号で故郷が、台風19号で長野が被災し、居ても立っても居られなかったところ、この活動に救われました。ここでしか出会えないであろう方々との共同作業は、とても楽しく、毎週の癒しです。(E.S)

・月2回の参加を目標に、伊那から通っている。水損した資料は多岐にわたる。古文書は泥を落とすと、江戸時代が現れる。年貢関係の文書や大般若経典を見ながら、地域の江戸時代を感じ、和紙と墨の素晴らしさを知る。一方で、この活動の出口はどこか、ボランティアの役割とは、などを考えながら作業を行っている。(K.K)

・台風19号により被災した文化財資料の救済には多くの手と知識が不可欠であり長期間を要する活動が今回結成されたボランティアプロジェクトであった。奇しくもこれまでのキャリアの中で無縁であったこのような活動に参画する機会があり今協働して地域重要資料を救済する補助的活動をしている途中である。したがって、現在活動の一旦を今後継いでいくことの大切さと眠っている地域文化財等を保全していく必要性を常に意識していかなければならないことを実感している。

(M.K)

・身近に起きた未曾有の災害、何かお手伝い出来る事がないかと模索していた時、市博から被災資料のレスキューのお話がありました。泥、カビ、独特の臭いの中、作業を続けて2年。手探りの作業の連続ですが、地域に残された歴史資料を残す一助になればと思っています。(M.Y)

・本年8月から文化財応急処置で松代長明寺約百幅の掛軸の作業が始まった。とある作業の過程で一幅の書跡の掛軸が目をつけた。なぜか既視感を持ったからだった。詳細に見るとお寺の山の名称が、我が家の菩提寺と一致した。とすればこの作者は菩提寺の先代住職の筆になるものと推察された。仄聞する処、達筆で有名であり、我が家にも掛軸が残されていた。それが起因して記憶から浮上したのであろう。早速写真を撮り現住職に照会を依頼した処、相違無いとの事。同一宗派の交際の中で依頼されたのではないかと。応急処置の中で垣間見る不思議な縁を感じさせる一瞬であった。(N.K)

・貴重な水損文化財等の保全ボランティアに参加させて頂き、何事も初めての経験で緊張の連続でした。そんな中、返却した際「立派に処置して頂き夢のようです」と喜んで頂き、嬉しかった。これもグループの方々のご指導のお陰と感謝しております。(N.M)

・身近で起きた災害のために少しでも役立てれば、と思い参加した活動。このまま埋もれてしまっていたかもしれない資料の、泥や汚れを落とすと現れてくる何百年も前の人々の暮らしと出会えることが楽しみでもあります。(T.I)

・文化財保全ボランティアの活動が2年を超えました。泥やカビのついた文化財の応急処置として、私たちのできることとできないこと、やっていいことといけなことの判断は常に難しいです。しかし、できる限りの処置をして所有者の皆様にお返しして地域の歴史や文化を守りたい、との思いを持ち続けています。(T.M)

・「お役に立てれば」と活動に参加して2年が過ぎた。無我夢中から試行錯誤を経て、今もなお専門家から新たな知識や技術を教えてもらう度に、「なるほど」と感心し、私の中の引き出しが増えていく楽しさがある。現在手掛けている文書は江戸時代のもの。応急処置をしながら「二百年前この文書に筆を走らせていた人が確かにいた」と想像するだけでまた楽しい。楽しさこそが継続の源だと思う。(Y.M)

博物館だより 第120号

発行日2021年12月28日

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414

TEL:026(284)9011

<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum>

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原3400

TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659

TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3

TEL:026(262)3500

ミュゼ蔵

〒381-2405 長野市信州新町37-1

TEL:026(262)2500